

結とその後の両国関係の実態は、日本・ハンガリー関係史の中の重要な一コマではないだろうか。本書第6章では、枢軸国が主導しようとした「世界新秩序」構想が、日独同盟の枠内で取りあげられ論じられているが、ハンガリーが満州国を承認し、日独防共協定に参加したのは1939年である[梅村 2013: 175]。「トゥーラン民族」の同胞として日本・ハンガリー両国が戦時下の協力関係を築いただけでなく、ドイツを含めた枢軸国同盟のなかで、ハンガリーが果たした役割を検討することも、日本の政治外交史におけるトゥーラン主義の意義を確認することになるように思われる。

今岡のトゥーラン主義運動は、彼の10年に渡るハンガリー滞在での両国の親善関係促進の活動や、日本語教育や日本紹介などの文化活動を見ると、「日本人にヨーロッパで最も親愛なる国ハンガリーを心をこめて紹介したい」[梅村 2013: 200]という彼の言葉に現れているように、同じ「トゥーラン民族」としての日本・ハンガリー両国同胞の連帯実現に重きがあったと言っても良いだろう。津田塾大学図書館所蔵の「今岡十一郎文庫」には、今岡の所蔵図書、雑誌、および手書きの研究メモとノート類からなるおびただしい数の未整理の資料群があるという。日本・ハンガリー関係史の包括的な研究[梅村 2013: 205]およびトゥーラン主義運動と回教政策に関連する研究をさらに深めるためにも、同文庫の整理と分析が俟たれる。

<参考文献>

- 今岡十一郎 1956-1957「ハンガリー滞在11年 1～3、最終回」『日本週報』390, 392-394.
 梅村裕子 2013「今岡十一郎の活動を通して観る日本・ハンガリー外交関係の変遷」『国際関係論叢』2(2), pp. 159-206 (1-48).
 大杉千恵子 2003「ハンガリーにおける日本語教育史概観」『国際開発研究フォーラム』23, pp. 177-200.
 小野亮介 2019「汎トゥーラン主義」小松久男(編)『テュルクを知るための61章』明石書店, pp. 297-301.
 小松久男(編) 2000『中央ユーラシア史』(世界各国史4)山川出版社.
 近藤正憲 1998「三井高陽の対東欧文化事業——ハンガリーのケースを中心に」『千葉大学社会文化科学研究』2, pp. 33-63.
 『世界民族問題事典』1995 松原正毅(編集代表)・NIRA(編集)平凡社.
 田澤拓也 1998『ムスリム・ニッポン』小学館.
 中生勝美 2016「民族学研究所——戦時中の日本民族学」、「内陸アジア研究と京都学派——西北研究所の組織と活動」、「イスラーム研究とムスリム工作——内陸アジアと東南アジア研究」『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』風響社, pp. 317-502.
 永田雄三 2004「トルコにおける『公定歴史学』の成立——『トルコ史テーゼ』分析の一視角」寺内威太郎・李成市・永田雄三・矢島國男『植民地主義と歴史学——そのまなざしが残したもの』刀水書房, pp. 107-233.
 Levent, Sinan. 2019. “Japan’s Central Eurasian Policy: A Focus on Turkic Muslim Minorities,” *Social Science Japan Journal*. 22(1), pp. 127-149.

(店田 廣文 早稲田大学名誉教授)

竹田敏之『現代アラビア語の発展とアラブ文化の新時代——湾岸諸国・エジプトからモーリタニアまで』ナカニシヤ出版 2019年 v+366頁

アラビア語は聖典クルアーンの言語としてその神聖さ、高貴さを誇る言語である。イスラームの発展とともにアラビア語は、ムスリムが習得すべき言語としての地位を確固たるものにしていった。神の意図はアラビア語によってのみ解釈されるという信仰のもとアラビア語の文法体系が整えられ、アラビア語を母語としないムスリムへの教育が促進された。しかしアラビア語の学習がイスラームの学習と同意である時代はすでに終焉し、評者のように現在日本でアラビア語教育の現場に携わる者は、アラビア語の学習動機が多様化に驚かされるとともに新たな教授理念を模索する必要性を感じているであろう。ではその教育現場で誰もが習得

すべき言葉として位置づけられているアラビア語の実態とは何であろうか。2010年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出された博士論文「現代アラビア語の成立とアラブ世界の形成——文法改革と現代標準語の普及を中心に」に加筆修正が施され、新たにモリタニアと湾岸諸国に関する章が加えられた本書は、多様な視座に基づく研究成果を通じてアラビア語教育に携わる多くの人々に有益な情報と指針を提供するすぐれた一冊となっている。

序論で示された本書の目的をまとめると、民族の枠を超えたイスラームの言語としてのアラビア語が、アラブ民族の言語として現代アラブ世界の形成にどうかかわってきたか、その変容過程をその分岐点となる19世紀の文芸復興の時代から現在に至る社会変容との関連性に注目し、言語分析、学際的手法、フィールドワークの三つの手法を駆使して明らかにするということになる。その中でも著者が重要視しているのはこれまでの研究に欠けていた視点、すなわち動的な視点(10頁)に立ち、アラビア語がその時代の政治や社会変動と密接な関係を有しながらその形を変えてきたことを具体的事例を挙げて究明することであった。本書を通じて現在日本の教育現場でも当然のように教授される現代アラビア語という概念は、19世紀から20世紀、さらに現在にまで及ぶアラブ世界の政治や社会変動の産物であり、またそれを生み出した多くの識者の努力の積み重ねによることが明らかにされる。もう一点、著者の問題意識の核心をなすのは、「アラブ世界の政治や社会変動」と前述したこのアラブ世界とはそもそもどのような概念かという問いである。アラビア語はアラブ世界で使用されている言葉である、と我々はアラブ世界の存在を自明なこととして受け入れているが、著者は、果たしてそれは妥当なことかどうかと問いかける。アラブ世界とは何かの要因によって形成されてきたものであり、その形成とアラビア語の間にはどのような関係性がみいだされるのであろうかと。それゆえ本書の第1章は、「アラブ世界形成論と現代アラビア語研究史」と題された。

本章では、アラブ世界の形成と現代アラビア語の研究めぐる20世紀半ば以降に盛んになる主要な理論について検証される。アラブ世界の形成については、イスラームとアラブ化(アラビア語化)することは一体であるとするウンマ実在論、そして個別の領域国家の集合体がアラブ世界であると主張する総和論、また現代アラビア語研究については、ダイグロシア論をはじめとする諸理論がある。著者は、これらの理論に共通することとして、アラビア語が使用されている地域内に生じた文化や政治状況の変化の中でアラビア語の実体と変容を考える視点に欠けていた点を指摘し、その背景を批判的に分析する。こうした先行研究の限界を克服する試みとして著者が注目したのが「アラビア語の位相」概念であった。イスラームの普遍語としてのアラビア語と民族言語としてのアラビア語を峻別し、歴史を通じて、また現代の言葉としてもアラビア語の実相を分析する、著者が斬新なモデル(33頁)と評価する概念を本研究において採用することが明示される。

前述したようにアラビア語をアラブ世界と称されている地域の歴史の中で、イスラームの言語としての普遍性とアラブ民族の言語としての民族性を峻別することなく現代アラビア語の形成は説明しえないという視座から第2章は「オスマン帝国の崩壊とアラブ諸国の独立」がテーマとなった。

オスマン帝国時代、イスラームの統合原理、またアラブ地域の行政用語としての役割を担っていたアラビア語は、トルコ民族主義の台頭とともに19世紀後半から宗教横断的な民族語として新たな方向性を見出していく。その契機となったのが、シリアやエジプトにおけるアラブ文芸復興(ナフダ)運動であり著者は、プトルス・プスターニーらこの運動を推し進めた知識人たちの活動、アラビア語改革、アラビア語の公用化運動などの成果を明快にまとめている。そしてオスマン帝国の崩壊によって成立する国民国家体制を経てアラビア語を紐帯とする現代アラブ世界の形成に決定的な役割を果たしたのが1945年設立のアラブ連盟であり、この時期、民族思想家サーティウ・フスリーの手によって確立されたアラブ民族に関する定義「アラブの国々に帰属し、アラビア語を話す者はアラブ人である。またウルーバ(アラブ性)とは、アラビア半島の者に特別ではなく、またムスリムだけに特別なものではない」(54頁)はアラブ民族意識の形成とアラビア語の関係を明確に述べたものとみることができると指摘される。

続く第3章ではイスラームの普遍的言語としてのアラビア語から民族言語としてのアラビア語へ変容する要因が文法学の視座から取り上げられる。タイトルである「アラビア語文法学の現代化とイウラプ論争」が示しているように、本章の中心的テーマは、イウラプ、すなわち語末の母音変化をめぐる解釈の問題である。クルアーンの解釈において意味を決定する語末の母音の読み違いは致命的な解釈の対立を生むことから、イウラプはアラビア語文法学の核心をなすものであった。本章では、古典文法におけるアーミル論

(語末変化に影響を与える作用を探す考え)に注目して検証され、このアーミル論に代わる新たな解釈を構築する努力を通じて現代アラビア語が形成されていく過程が分析される。そして20世紀以降エジプトを中心に始まったイウラーブの改革をめぐる議論が学校教育の文法整備の役割を果たし、アーミル論に代わって語末の母音変化は、文中における機能を表すものという新たな解釈が生まれ、この解釈が学校文法と現代アラビア語の形成に重要な役割を果たしたことが明らかにされる。オスマン帝国末期からその崩壊後、この地域で素早く西欧の近代技術の導入を図ったエジプトは、アラビア語改革の面でもこの地域において指導的役割を果たした。

第4章は、「現代エジプトにおける文法改革と「国語化」の試行」と題され、エジプトにおけるアラビア語文法改革において先導的役割を担ったイブラーヒーム・ムスタファーとその著書『文法学の復活』(1937年刊)の役割について詳細な分析が行われる。ムスタファーが批判の対象としたイウラーブ論の中核をなすアーミル論の本質は、思弁神学の影響を受けた抽象的文法学であることが明らかにされ、ムスタファーは、語末の母音変化は、アーミル(作用)による結果ではなく、語と語のつながりや文の構成における意味的な関係を示すものとした。一方で大衆文化に圧倒的影響力をもつアーンミーヤ(口語)に対し、初等教育における正則アラビア語の徹底が図られた。そのために国定教科書の作成と教師の再教育問題が急務とされた。著者は、ムスタファーが提出した文法改革案について詳細な考察を行い、エジプトにおけるアラビア語教育の基盤がそれまでの抽象的解釈文法からより具体的でわかりやすい表現文法へ移行する段階に入ったことを明らかにしている。こうしたアラビア語改革はこの時点では、まだエジプトの国内問題であったが、これがアラブ民族の問題となるには次の時代を待つ必要があった。その時代とアラビア語の諸問題を取り上げたのが第5章「アラビア語アカデミーと現代における正書法改革」である。

アカデミー設立の時代は、前述したフスリーの唱えたアラブ民族の定義がパレスチナ問題の発生もあり、広くこの地域の人々に共有される時代であった。それを政治面で具現化したのがアラブ連盟であり、またアラビア語の諸問題に関する議論の場を提供したのがアカデミーであった。本章では、アラビア語が一国内の言語からアラブ人が共有する民族語として理解される過程が文字体系と正書法をめぐる論議を通じて明らかにされる。アラビア語の正書法は、ウスマーン版クルアーンの綴りの保持を基本とする古典的なラスム学と時代の変化にともないその書体を変えようとする書記たちの実務上の学問として発展するが、19世紀に入り印刷所の開設と校訂学の発展により新たな整備が必要となった。著者は、正書法をめぐる議論の中から最もやっかいな問題とみなされたハムザの文字に焦点を当て、カイロのアカデミーを中心に議論された内容に関し、それを4段階に分けて詳細に検討した。そして現在多くのアラブ諸国が採用しているハムザの正書法は、アカデミーによって1960年に承認された原則であることが明らかにされる。またこの原則が採用される背景にはパレスチナ問題の発生、エジプト革命、エジプトとシリアによるアラブ連合共和国の誕生など、アラブ民族主義の台頭にみられる政治状況の変化があったことが明白である。それゆえエジプトがイスラエルとの単独和平締結という独自路線を歩むとアカデミーは、1980年にエジプト方式と呼ぶべき新たな指針を採用することになる。こうしてアラビア語は文法上でも正書法上でもこれまで維持されてきた原則と決定的な断絶とはいわないまでも徐々に簡略化され、学校教育の現場で使用に値する実務的要素を備えた言語へと変容を始めた。しかし時代の要求にこたえる言語としての役割を果たすために克服すべき重要な課題があった。それがタアリーブ、すなわち外来語の概念のアラビア語化問題であった。

第6章のタイトルは、「アラブ的近代知の形成と学術用語の整備」とされ、タアリーブをめぐるアカデミーにおける議論について検証される。タアリーブ論は、新たな単語をアラビア語として導入する場合、その妥当性をどこに求めるかという議論であるが、ここで著者が注目したのが例証の時代という概念である。辞書や文法解釈において純粋なアラビア語の例証として採用、引用が許される時代のことである。それまで遊牧民の場合は10世紀、定住民の場合は8世紀までと定められた例証の時代の見直しは、ナフダの時代を経て20世紀にはいると文法改革や学術用語の整備に携わるエジプト、シリア、イラクのアカデミーにおいて行われた。そしてその成果は、1960年、カイロのアカデミーが発刊したアラビア語中辞典においてムアッラブ(アラビア語の語形パターンによってアラビア語化)、ダヒール(外来語の音訳)、ムワッラド(例証の時代後ムハンマド・アリー時代まで)、ムフダサ(ムハンマド・アリー時代以後)の4分類として整理され、造語方法については、アラビア語らしさをイシュティカーク(3語根から派生する仕組み)に求める傾向にあ

ることが明らかにされる。本章でも現代アラビア語とアラブ民族主義思想を契機に誕生に向かうアラブ世界という概念について指摘されるが、著者はアラブ世界の形成論に新たな視座を置く試みとして西アフリカの一国、モーリタニアを取り上げる。それが第7章の「現代モーリタニアにおけるアラブ・イスラーム文化の諸様相」である。

モーリタニアでは、15世紀、イエメンの遊牧民ハッサーン族の移住によってそのアラビア語化が始まる。ハッサニーヤとして知られる方言は、モーリタニアのアラブの血統意識とアラビア語との密接な関係を示している。そしてモーリタニアにおけるアラビア語学の伝統は、モーリタニア人の自称であるシンキーティーの知識人とマフダラと呼ばれる移動型私塾を通じた暗記文化を重んじる教育方法に見て取ることができ、これによりモーリタニアは、百万人の詩人の国と称えられるほどアラビア語の世界において高い地位を獲得した。本章ではこれまで注目されてこなかったナフダ期のエジプトにおけるシンキーティー知識人の役割や湾岸諸国におけるシンキーティー知識人の活躍、サウジアラビアの近代化における彼らの多大な貢献についても明らかにされる。現在、政治的にも文化的にもアラブの一員としての自覚を有するモーリタニアを通してアラブ世界形成論が新たな方向性を持つ事例として注目される。モーリタニアがアラブの一員としての自覚を有する背景の一つには、著者の指摘にもあるようにクウェイトで1958年に発刊された総合文化誌アル・アラビーなどのプリントメディアの存在があった。ではどのようなメディアがこの地域で発展し、現代アラビア語の形成にどのような影響を及ぼしているのであろうか。それを湾岸地域に焦点を当て分析したのが続く第8章の「湾岸アラビア語の趨勢とプリントメディアの発展」と最終章である第9章の「インターネット時代と変容するアラビア語」である。

まず湾岸諸国におけるアラビア語を特徴づける点が整理される。一つは、この地域においては部族方言、各国方言、湾岸地域方言、共通語としての標準アラビア語、イスラームの普遍語としてのアラビア語が共存するという言語意識の重層化があること、もう一点は方言や民族的語彙をアラビア半島由来の由緒正しいものとして受け入れ、エジプトやシリアに見られるように標準アラビア語から方言を排除する傾向はみられないという点である。またアラビア語は、政治面においてはナバティヤナフマと呼ばれる方言詩による発信と出版文化を通じた伝統文化の保持、再認識によって国民統合を進めるうえで重要な役割を果たしていることが明らかにされる。特に詩人オーディション番組は湾岸地域を新たな文化発信の拠点として構築するうえで注目に値する役割を果たし、またサウジアラビアにおけるクルアーン印刷所の開設(1982年)に見られるようにアラビア語研究の本場がエジプトから湾岸地域へ移行している現状が明快に描き出されている。

最終章では、アラブ民族主義と文法改革の進展によって成立した現代アラビア語が、インターネットの時代を迎えてどのような変容を遂げ、新たなアラビア語、メディアアラビア語として成立する可能性について分析される。現代標準アラビア語と同義で使用されるメディアアラビア語であるが、その特徴は、機能的側面をより重要視した実用的な言語であることにある。誰でも使える言語としてメディアアラビア語では、ローカル色を強調する方言の使用も普通にみられ、ネット口語と呼ばれる若者言葉も広く使用されている。著者は、メディアアラビア語で使用される翻訳語や新単語は、4つに分類されると具体的例を示しながらアラビア語的調和を感じられるようイシュティカークの活用がここでも確認されると指摘する。こうして現代アラビア語は、それを取り巻く政治や社会環境の変容に応える形でその機能を変化させ、ナフダ以来出版文化やメディアの面で主導的立場を担ってきたエジプトやシリアに代わって湾岸地域が新たな文化的拠点としてその存在感を高めてきていることが明らかにされる。

評者が序論で取り上げられた二つの重要な問題として指摘した点について、著者は結論において、現代アラビア語は、書き言葉と話し言葉の実用的機能を強化して普及し、これまでのような文語と口語の対立関係が適用できない言語社会がすでに形成されている事実を指摘する。そして現代アラビア語は、その歴史の流れとともにアラビア語を使用する人々の社会や政治・経済が変動する中で社会と結び付きながら、文化や思想の動態の中で変容してきた(262頁)と結んでいる。また二つ目の問題については、アラブ世界とは、アラビア語をめぐる知的論争の場と表現媒体としての共通語であるアラビア語そのものの双方が鍛錬され強化されることで形成されている世界(263頁)であるとし、現在インターネットをめぐる共通語の普及とアラビア語話者の新たなつながりによって形成されつつある第3極的な中間の標準語であるメディアアラビックの台頭の背景にはこのアラブ世界が厳然として存在することが確認できるとした(266頁)。

以上各章の概要を述べたが、冒頭でも述べたように現在日本のアラビア語教育の現場に携わる者として本書を読んだ評者にとって、各章で扱われたテーマと検証結果は、どの章をとっても今後のアラビア語教育に新たな方向性を見出すヒントを提供する非常に意味のあるものとなっている。また巻末に加えられた年表、アラビア語・アラブ世界の史的展開と現代化(325頁)は、2018年までをカバーしており、読者は、この年表から本書のテーマをアラビア語史全体の中で確認することができるとともにアラビア語と時代背景を関連づける有益な視点を見出すことができるであろう。

各章で検証された事実を一つ一つここで振り返ることはできないが評者は、文法学を軸とした言語分析として第3章のイウラーブをめぐる議論や第4章のイウラーブの現代的改革を試みたエジプトのイブラーヒーム・ムスタファーの試案、そして第6章のタアリーブに関する例証の時代の位置づけ問題は大変興味深く読み、多くのことを学ぶことができた。また日本のアラビア語教育の現場で誰もがその取扱いに苦慮していると思われるハムザの表記をめぐる問題は、第5章で詳細に検証された。60年指針を基本原則として考えていた評者にとってエジプト方式と呼べる80年指針の存在を知ったことは、アラビア語教育の幅を広げるうえで非常に意味のあるものであった。

一つ今後の研究課題として期待することは、著者が重点を置いた動態的視点についてグローバル化時代のアラビア語という視座からのアプローチである。第1章でアラブ文芸復興期を第1期とする5つの時代区分が仮説として示され、その最後5番目は、現代アラブ世界の形成と国家主義の台頭期(70年代～)とされた(35頁)。1970年代以降のアラブ世界は、国家主義、宗派主義、イスラーム復興主義などの影響を受けた様々な政治・社会変動に見舞われた。その中でも本書の第8章、第9章の時期に相当するであろう1990年代からそうした変動への対応策について注意が喚起されているのは、著者がメディアアラビア語として普及し、さらに新たな単語を生み出している例として紹介した *عولمة* (244頁)、すなわちグローバル化である。著者が年表でも記した2003年の外国軍によるイラクの首都バグダードへの直接侵攻とサッダーム・フサイン政権の崩壊は、グローバル化の実体、その危険性をアラブ人に思い知らせる契機となった。その時アラビア語について何が語られたのであろうか。評者も以前この問題を取り上げたことがあるが、2008年、ダマスカスで開催された第20回アラブ首脳会議では、アラブ連帯を求める一連の勧告の中でパレスチナ問題やイラク問題などに先行してアラビア語と政治的指導者たちの責任への言及があったことは注目に値するであろう。アラビア語はグローバリゼーションの時代において科学と知識と情報の発展とともに成長、発展していくべきであり、それによってアラブ文化に向けられる非難や中傷に耐え、それを克服する近代性を備えた道具となるべきである、と政治的指導者たちへアラビア語への特別な配慮を求めた勧告の中に評者は、アイデンティティの危機を感じ取るアラブ人とアラブ世界の不安感を見出す。グローバル化は、他の言語をコントロールする力をもつ最強の言語が驚くべき速さで押し寄せることを意味し、その結果アラビア語は息の根を止められるのではないかと、当時のイスラーム教育・科学・文化機構事務総長は、その懸念を表明していた。アラビア語は、今世紀に入り、国家の主権、アラブ世界の安全保障にかかわる戦略的な問題の一つとして位置づけられたと言えるだろう [新妻 2011]。

本書によって確認されたように、1世紀にわたってアラビア語改革は、言語改革と社会改革の不可分性とアラビア語の持つ言語刷新力の潜在的可能性を証明してきたと言える。グローバル化の実体を目のあたりにしたアラブ世界が、この1世紀の経験を基にアラビア語をどのような方向に導き、変化させていくのであろうか。取り上げるべきテーマは多い。アラブの春と呼ばれた政治・社会改革運動から現在まで10年に及ぶ激動期にあるアラブ世界であり、様々な制約があると思うが、本書の成果を踏まえさらなる研究領域の広がり新たな視座の提示を期待したい。

<参考文献>

新妻仁一 2011「中東とグローバリゼーション——アラビア語をめぐる議論から見えてくるもの」星野昭吉(編)『グローバル社会における政治・経済・地域・環境』亜細亜大学購買部ブックセンター, pp.293-311.

(新妻 仁一 亜細亜大学国際関係学部教授)